

小林 登  
(Kobayashi Noboru)



チャイルド・リサーチ・ネット  
(CRN) 所長

医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) 所長。ベネッセ次世代育成研究所所長。日本子ども学会代表。日本赤ちゃん学会名誉理事長。日本母乳保育学会名誉理事長。日本子ども虐待防止学会名誉会長。

1954年東京大学医学部医学科卒業。米英留学。東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞 (1984年11月)、毎日出版文化賞 (1985年10月)、国際小児科学会賞 (1986年7月)、勲二等瑞宝章 (2001年秋)、武見記念賞 (2003年12月) などを受賞。

主な著作は、小児医学専門書以外には「ヒューマンサイエンス」(中山書店)、「子どもは未来である」(メディアサイエンス社)、「育つ育てるふれあいの子育て」(風濤社)、「風韻怎思—子どものいのちを見つめて」(小学館)、「子ども学のまなざし」(明石書店) その他多数。

## 「子どもは、二つの情報によって育っている — 遺伝と文化」

子どもの体は遺伝子の情報で作られ、家庭や社会のいとなみの中で得られる情報で体の全てをコントロールする脳を働かせ、子どもは育っている。それは、母親の胎内で遺伝子の情報で作られた胎児が、この世に新生児として生まれ、親の「育児」、専門家による「保育」と「教育」という文化の情報で育てられ、乳児、幼児、学童と体を成長させ、心を発達させて大人になると言える。

体の「成長」とは、簡単にいえば身長・体重などが増加して大人になることであり、心の「発達」とは、脳の働きを広くとらえて、体の動きが良くなることばかりでなく、知・情・意の力も大人になることであり、両者は表裏の関係にある。「成長」と「発達」にとって良い情報が重要であることは言をまたないが、体の成長には良い栄養も必要である。

遺伝子の情報は身体内の情報で、配偶子 (精子、卵子) を介して次の世代に伝えられるが、生活環境の中の文化は、身体外の情報で、それは人間のいとなみの中で行われる (模倣) (学習) (教示) (シンボル・言語の使用) などの脳の働きによって、親から子へ、人から人へと伝えられている。身体内情報である遺伝情報は、突然変異のような限られたメカニズムでしか変り得ず、しかも進化のように時間のかかるものである。しかし、身体外の情報、すなわち情報としての文化は、上述のメカニズムを考えると、教育などによって、進化に比べれば短い時間で変わるものである。

子どもの未来にとっての教育の重要性を考える時、この二つの情報の在り方を考えて、教育の在り方をデザインする必要がある。